

No. 7

博物館報



(小城鍋島家伝來の蒔絵什器類)

【写真説明】肥前小城鍋島家に蔵せられてきた什器類であって、角盥・様1具・桶・盥類12、馬具1具の17点の内、4点である。これら蒔絵什器類は、その造形、装飾様式から桃山時代から江戸初期に製作されたと推定されるものであって、重要文化財高台寺蒔絵度類などにその類例をみることができる。

菊桐紋蒔絵角盥・桶　梨地に金粉を施し、2カ所に金高蒔絵で菊紋1個を、その下部に桐紋2個を配している。また、高台、角、注口の基部および先端などの要所には金銅製金具を鉛で打ちつけており、製作法や文様の配置の在り方に他の桶類とは異った様式となっている。

菊桐紋蒔絵桶・杓子　黒漆を塗り、縁に金沃懸地を施し、金平蒔絵で菊紋と桐紋を大胆に配している。

総じて文様は菊紋と桐紋であって、これは桃山時代に盛んに描かれた障壁画のモチーフと同系であって、豪放で特色ある図柄を作りだしており、近世初頭における漆器工芸の一つとして価値が高い。

目次

小城鍋島家伝來の蒔絵什器類	1
新認証佐賀県内植物について（その4）	2・3
土生遺跡出土の木器	4・5
天保六年製臼砲	6
第四回研究講座から	7
仏像と仏画	8・9
博物館日誌、昭和47年度事業計画（予定）	10

新確認佐賀県内植物について（その4）

双子葉植物、合弁花

この植物群では40種の新認があるが、帰化植物の多いにおどろく。米国2、北米3、中米1、南米1、欧洲5、合計12種で、全体の約三分の一に近い。このことはアメリカ大陸やヨーロッパ諸国との交通の激しさを示している。これらの中には牧草として栽培されるため、またはそれにまじつてきたものもあるが、来歴が不明な物が多い。ヤナギハナガサ、セイヨウノコギリソウ、キンバイトウコギなどは花卉として輸入されたものと思われる。

離弁花のところでものべたが、土地造成、道路造成のため阿蘇高原方面からの芝生とともに搬入されたと考えられる。いわゆる搬入植物がある、ウスイロカクラマツバ、アソノコギリ、シオンなどで、今後さらに知られるようになるであろうが、平担地で元来とは、異なった気温や湿度などに順応して、どのように消長するかが面白い。更に調査、研究したいものである。

サクラツツジは九千部山でみつかった。もともとこの植物は、高知、大隅以南の地域にその分布が知られていたもので、本県でも予想されていなかった。花が美しいので今後強力な保護が必要である。

ヒメキランソウ（玄海沿岸諸島、長崎、鹿児島以南）の自生は、本県でも予想されていたが、確認されたもので、分布調査、密度の高さを立証することだろう。

ギヨクシンカは加部島で初認された。この植物は、南方系亜熱帯のもので、長崎県にはその自生が知られていたので、本県での発見は不思議ではない。見落していたものだろう。クチナシによく似た植物である。

県東部の湿地調査が倉成靖任氏を中心に進められた結果、サワトラノオ、スイラン、ミカワタキモ、ケンジュガヤ、クロタマガヤツリ、ヒメナエなどが初認されている。一方県西部でも湿地調査が行なわれ、イヌタヌキモなどが知られるようになった。

今後も、平野部および山麓部の調査が行なわれていく必要がある（従来は山地の調査に重点がおかれていた）この方面には搬入、帰化などの植物を含めて、新



(ツツジ科 サクラツツジ)

知見の植物が出てくるだろう。

佐賀県生物誌「植物篇」以降の新認植物については馬場胤義先生が昭和41年から「佐賀の植物」に4回にわたって「佐賀県新分布植物」という題名で連載されている。馬場先生は新しい植物の同定については、下記の先生方にお願いして、正確を期しておられたものである。

東京大学 原 寛博士 (S. 46退職)、山崎敬博士、

大橋広好博士、桝山泰一博士、倉田悟博士（農学部）

東邦大学 久内清孝博士（帰化植物）

横浜大学 北川政夫博士

国立科学博物館 大井次三郎 (S 45退職)

東京教育大学 木村陽二郎博士

東北大学 木村有香博士 (S 45退職)

京都大学、北村四郎博士 (S 45退職) 村田源先生、三木 茂博士、堀田 滿博士、

大阪大学 田村道夫博士

神戸女子大、室井 韶博士

金沢大学、里見信夫博士

鹿児島大学、初島住彦博士

以上4回にわたって県内新認植物についてその概略を解説したが、本稿を起稿するにあたって、佐賀植物友の会幹事、倉成靖任氏（県業務課職員）と同幹事、井上英幸氏（神農高三脊分教諭）に資料の提供をいただいたものである。

県内の自生植物は変種、品種を含めて下記のとおりである。（S 46, 8, 1現在）

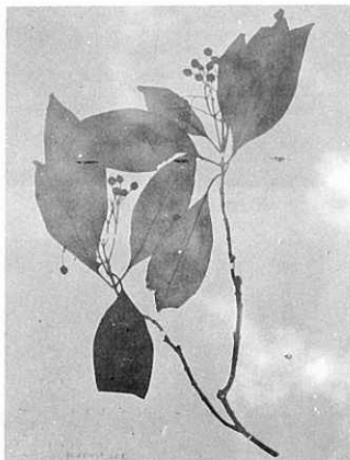
シダ植物	2 7 7
裸子植物	1 4
單子葉植物	5 5 0
離弁花類	8 1 7
合弁花類	5 1 7
	合計 2 1 7 5



(シソ科 ヒメキランソウ)

◎被子植物(双子葉類)、合弁花

科 名	種 名	産 地	
●ツツジ科			
202. サクラツツジ	九千部山		
●サクラソウ科			
203. サワトラノオ	三田川町目達原		
●フジツブギ科			
204. ヒメナエ	三田川町目達原		
●リンドウ科			
205. シロバナリンドウ	八幡岳		
●ヒルガオ科			
206. マルバアメリカアサガオ	鹿島市(米国原産-帰化)		
207. マメアサガオ	佐賀市(北米原産-帰化)		
208. ホシアサガオ	太良町大浦(米国原産-帰化)		
209. ハマネナシカズラ	波戸岬		
●クマツヅラ科			
210. ヤナギハナガサ	佐賀市(南米原産-帰化)		
●シソ科			
211. シロバナニシキゴロモ	脊振山		
212. シロバナオドリコソウ	嬉野町、相知町		
213. ヤブイヌゴマ	佐賀市(欧州原産-帰化)		
214. シロバナウツボグサ	嬉野町、相知町佐里		
215. シロバナイブキジャコウソウ	黒髪山 神集島、加部島、波戸岬		
216. ヒメキランソウ			
217. エゾシロネ	三瀬村井手野、浜玉町鳥巣、富士町杉山 七山村桑原		
218. コシロネ			
●ナス科			
219. オニナスビ	佐賀市、嬉野町大野原(欧州原産-帰化)		
●ゴマノハグサ科			
220. スズメノハコベ	三田川町立野 東脊振村大曲		
221. シソクサ			
●タヌキモ科			
222. ミカワタヌキモ	佐賀市川久保 蕨木町天川、浜玉町鳥巣、上峰村		
223. イヌタヌキモ			
●アカネ科			
224. マルバジュズネノキ	御船山		
225. ウスイロカワラマツバ	東脊振村横田(搬入)		
226. ギョクシンカ	加部島		
●スイカズラ科			



(アカネ科 ギョクシンカ) (おわり)

(学芸課 手塚 静雄)

新資料紹介

土生遺跡

ここに紹介する資料は、昭和46年9月1日～9月30日まで「土生遺跡調査委員会」（県教育委員会・三日月町教育委員会）によって発掘調査が実施された弥生時代中期の住居址より出土した遺物で、現在当館に一括保管されているものの中から主な土製品・石製品・木製品を選んだものである。

遺跡は岩蔵谷に源を発する紙園川と、晴気谷に源を発した晴気川とによって形成された扇状地にあり、佐賀平野の西端小城郡三日月町久米字柳町4-2560に位置する。

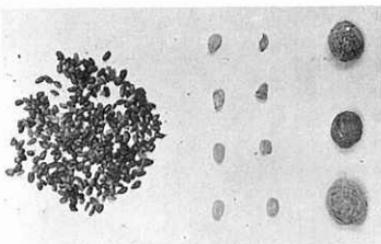
この遺跡は、炭鉱鉱害水田復旧工事の排土作業中、多数の土器片と木片が発見されたことにより注目され、緊急調査が実施された。なお、本格的な調査は昭和47年度に計画されており、弥生時代の農耕集落跡の究明が期待される。



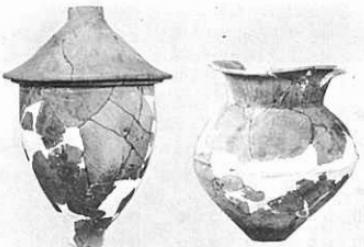
①土生遺跡②久蘇遺跡



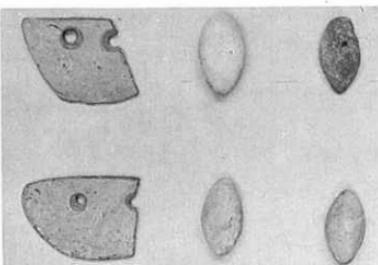
木器出土状況



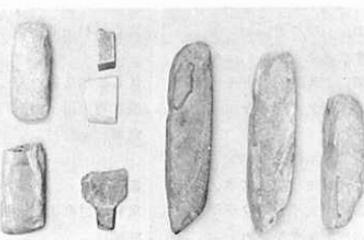
炭化米・木の実等



完形土器



石庵丁・土弾



石斧・石ノミ・石剣



①板 鋸 と 柄
長62.5cm 巾13.5cm



②二 叉 鋸
長44.0cm



③三 叉 鋸
長34.5cm
④織 機 部 分
長26.0cm 巾 7.5cm



⑤木 剣
長14.5cm 巾 3.2cm



⑥石 斧 の 着 柄
長27.5cm



⑦織 機 部 分
長35.0cm 巾 5.8cm



⑧鋸 の 部 分



⑨火 鎌 白
最大長 9.7cm



⑩漆器出土状況

〔土生遺跡出土主要木器〕

(学芸課 森 醇 一朗)

資料紹介

天保 6 年製白砲

当館で現在展示中の白砲は武雄市所蔵のもので武雄鍋島家に保存所有されてきた21ドライム青銅製白砲である。高島秋帆が天保3年(1832)自費でオランダより購入した20ドライムモルチールと同型同寸法のものといわれている。

前装式滑腔で火門に道火を仕かけ点火して発射するもので口径20cm、全長56.2cm、砲身の厚さ、5.1cm、砲腔長35.5cm、その奥に絶 9.5cm長さ11.5cmの薬室がある。外筒には先端部と中央部にそれぞれ砲身より2cmの厚さの凸帯がまわされ中央部には帶部の上に一つの把手がついている。底部の両端には架台取付け用の絶10.7cm長さ10.3cmの円柱がつけられている。砲身の上面には武雄鍋島家の「銀杏紋」の銀の張付けがあり、後部火門の辺には“IN HET JAAR 1835 (HOLLANDSCH) EERST GECOTEN TE JAPAN”(訳 オランダの年号1835年に初めて日本にて铸造せらる)の刻字があり裏面には

* 皇国英児児聞基 高島四郎兵衛源茂紀
高島四郎太夫源茂敦

日本礮術家從来未知放之造之

天保六年乙未七月令鑄法門人鳴安宗八鑄之”的刻銘がある。

英児児見はモルチールのことと、源茂紀は高島秋帆の父、源茂敦は秋帆の字である。鳴安宗八は武雄の鉄物師谷口良三郎の門人であろうといわれているが、秋帆が天保8年(1837)肥後藩の家老有吉市郎兵衛のために造った白砲にも「皇国英児児聞基 高島四郎太夫源茂敦 日本礮術家從来未知放之造之 天保八年丁酉六月令鑄法門人鳴安宗八鑄之」とあるところから秋帆の直接の門人であることに間違いない。なお西洋砲術の開祖は一般に高島秋帆といわれているが、父四郎兵衛は荻原流砲術の師であり武雄の白砲の銘によってその開祖は秋帆の父、四郎兵衛であることが証明された。肥後藩の池部啓太や武雄の鍋島十左衛門茂義も始めは四郎兵衛茂紀に学んだのであろうと軍事史家の有馬成甫氏は論究されている。

この白砲の由来については西洋砲術に最も関心の深かった武雄第28代領主鍋島十左衛門茂義(1800~1862)鍋島真正の義兄で本藩の諸役兼相続方や佐賀城城普請頭人などの重職をつとめる)が天保5年9月(1834)長崎にて高島四郎兵衛に入門し、翌6年高島秋帆を武雄に招いた。この時秋帆は、わが国で最初に铸造したこの白砲を茂義に贈り、モルチール術皆伝を授けたといわれている。威遠流砲術伝來記の奥書には朱墨で“



(天保 6 年 製 白 砲)

千種左忠太ヨリ承り候の項の中に、“天保六年武雄ニ於テモルチール其外放出ニ付高島四郎太夫ニモ罷越手配半越後殿死去ニ付放出無之候事。一右之末年不 分武雄永野村台場ニ於テ放出ニ付高島四郎太夫ニモ罷越候事”とあってモルチールの試射が永野村台場(東川登村永野)で行なわれたことを記している。一方この砲の铸造場所については武雄か長崎かは確たる資料がなく、今もって不明である。

武雄でのこのような経緯は、当時長崎警備の拡充をはかっていた佐賀本藩にとっては極めて関心深いことであり、これをもって本藩の西洋砲術の本格的研究にとりくむ緒をつくったといえる。直正は、早速、藩士坂部三十郎明矩(茂義の実弟)を武雄に派遣し、青銅砲の铸造にあたっている茂義に入门させ、天保11年(1840)には神埼岩田射場で高島流の砲術の実射を観察し、本藩でもこれを採用することにした。このことは後で反射炉による鉄製大砲铸造に成功し、全国で類のない347門の大砲(天保14~慶応3年)を造りあげる契機となったものといえるのである。

今ここに現存するこの白砲を前にして、わが国の西洋火術史の第一頁を拓いた郷土の先人が、いかに長崎警備に努力をはらってきたかを思えば感あらたなるものがある。

なお、この白砲を最初に考察したのは軍事史学家有馬成甫氏(当時海軍大佐、文学博士)で、「軍事史研究」第2巻第4号(昭和12年8月号)の「武雄鍋島男爵家所蔵の白砲に就て」であり、ついで武雄郷土史家石井良一氏の「武雄と西洋砲術」(昭和12年10月)である。また有馬氏は、「高島秋帆」(昭和33年吉川弘文館刊)「武雄の蘭學」(昭和37年武雄市教育委員会刊)でもこの白砲についてふれられている。

(学芸課 尾形善郎)

第四回研究講座から

講師 佐賀大学名誉教授

三 好 不二雄氏

この博物館に、名護屋城図屏風・朝鮮国礼曹の書・洪浩然の書などが展示されているが、これらを中心にして、時間の余裕があれば朝鮮の役に従軍した将兵の陣中日記または手紙などについて紹介してみたい。

従来、この名護屋城図屏風が発見されるまでは、天守閣が果してこの城にあつたのか、なかつたのか、確実な証拠がなかった。甫菴太閤記には、天守閣については何もふれられていないし、松浦記集成も天守台のみだという表現をしている。そこで、この城は非常に急いで築かれた城であるため、天守台だけが造られて天守閣までは造られなかつたのではないかとうかといいう説がかなり行なわれていた。ところが一方では、明の使者が書いた日本往還日記に、五層の楼を造ると誌されているが、とにかく名護屋城の天守閣については、従来その実在性が疑われていた。しかし、この名護屋城図屏風が発見されたことによって、天守閣が造られていたことは疑う余地がないようになった。

鍋島直茂公譜によると、名護屋の天守閣と二の丸の大手櫓は、鍋島直茂が受持てて建てたことになっている。鍋島主水戦功記には、肥前国という同國のゆえをもって、鍋島直茂が名護屋城の天守櫓を造らせられた、と書いてある。この鍋島直茂が名護屋城の天守閣を造ったということは、信頼できるかどうか。このことは、従来中央では余り取りあげられていない問題ではあるが、注目されてよい問題であると思う。

残っている確実な史料によると、九州のおもだった大名たちが、いずれも名護屋城の築城に従事しているということは、否定できない。鍋島直茂公譜は、後になって甫菴太閤記などを参考にして、名護屋城の作事とその担当大名などを挙げていると考えられるが、それとは別に、古くから佐賀には名護屋城の天守は鍋島直茂が造った、もっと具体的にいえば、蓮池城の天守を名護屋へ持つていて、名護屋城の一部に使ったのだ、という伝承があったと思われる。

そこで、蓮池城の天守を名護屋へ持つていったという伝承は正しいだろうか。竜造寺隆信が戦死した後に、鍋島直茂は蓮池城にいたが、直茂が佐賀に移ると、こんどは鍋島勝茂が蓮池城に入り、慶長の中期に佐賀城が完成するまで、勝茂はこの城にいた。この点だけからみても蓮池城は、鍋島氏にとって重要な城であった。そこで、蓮池城について調べてみると、慶長4年ごろ清茂（勝茂）が、「佐賀蓮池城の普請の儀油断あるまじく候」と指令している。この時の普請は、佐賀城よ

りむしろ蓮池城の方が中心であつたらしいということが推定される。そして、できあがった蓮池城にはあきらかに天守閣が建てられている。慶長7年の勝茂の文書に、「蓮池城の天守雨洩り候間漆喰申しつけ候」とある。慶長7年までには蓮池城の天守は、でき上ったが漆喰がしてなかつたので雨洩りがした。そこで、黒田藩から漆喰のしかたを教わっている。また、最近発見した文書によって、慶長4年7月に天守の棟上げが行なわれたことが判明する。しかし、元和の一国一城令によって、蓮池城の天守・櫓などすべて佐賀城に移されてしまった。

佐賀城は、慶長12年11月から天守閣の瓦を焼き初め、翌13年から石を用意し、16年にでき上つたものと考えられる。

甫菴太閤記にのっていない名護屋城普請の前期の作事は、九州の諸大名によってなされたとみられるが、その中で天守を造るとなれば国元である鍋島直茂が割当てられた可能性が強い。しかし、この名護屋城の天守は、五層であった。フロイスの見聞記に、6ヶ月という短日月になぜこれだけ立派な城ができたか、それは割当てられた大名たちが自分のところの建物を取り寄せて建てたからだ、と書いている。そこで、当時の情況から考えて、蓮池城の天守を名護屋へ移したことは、ありえないことではない。しかし、蓮池城の天守を名護屋城の天守にしたという記録はない。名護屋城図に見えるあの堂々とした五層の天守閣が蓮池城に当時すでに建っていたとは考えられない。そこで、蓮池城の天守は、名護屋城の天守以外の櫓などに転用されたのではないかということが考えられてくる。

名護屋城図が発見されたことによって、天守閣の問題が改めて重要性をおびてきたといえるのではないかと考え、一応とりあげてみたが、結論は保留しておきたい。

（2月19日に行なわれた博物館研究講座の要旨であって、紙面の都合により天守閣以外の分は削愛した。文責、博物館）



肥前名護屋城図屏風部分（天守閣）

展示資料紹介

仏像と仏画

当館では、三田川町東妙寺の木造聖観音立像（模造品）・牛津町常福寺の木造帝釈天立像・大和町高城寺の木造円鑑憲師坐像、この3体の重要文化財指定の木造彫刻を展示公開していた。今般、所有者である寺院等の理解あるご協力によって、小城町円通寺の木造持国天立像・神崎町辻の木造薬師如来坐像および木造脇侍菩薩立像の3体の仏像、それに、鹿島市誕生院の八字文殊菩薩騎獅図像・神崎町地蔵院の地蔵菩薩図像・鹿島市蓮巖院の不動三尊図像の3幅の仏画を常時公開することができるようになつた。このため、本館の仏教美術関係の展示が著しく充実するに至つた。



（木造持国天立像）

木造持国天立像は、四方守護の四天王像の中の1体であつて、円通寺にはこの像とともに他に多聞天像が伝存され、ともに県重要文化財に指定されている。持国天は、像高167センチの堂々たる立像で、大部分素地を現わしているが、漆箔、彩色、截金のあとをとどめている。腰をひねり、片手を腰に片手を上に振りあげ、躍動的な姿勢と厳しい忿怒の相は、鎌倉時代末期の作とはいえ、鎌倉彫刻の面目躍如たるものがある。

この像と対をなす多聞天の胎内に、「永仁二年（1294）大仏師尾張法眼湛幸」の墨書銘があり、この二天

像は同一人の作になるものと推定されるところから、この像が鎌倉時代末期の名工湛幸の作になるものであることが知られる。



木造薬師如來坐像
および
木造脇侍菩薩立像



木造薬師如來坐像および脇侍菩薩立像の3体は、神仏習合の江戸時代末期まで神崎町に鎮座する古社櫛田宮の本地仏であったが、明治維新の神仏分離の際に神崎町に遷されたものである。本尊の薬師如來は、像高1メートル余りの坐像で、彫眼の漆箔像である。脇侍の日光・月光の両菩薩立像は、素地を現わしているが一部に漆箔の名残りをとどめている。

薬師如來像は、彫りも深く均齊のとれた姿態で、おかしがたい嚴しさがあり、鎌倉時代の如來像として県内では最もすぐれた作の一つである。脇侍の両菩薩像は、玉眼嵌入で、室町時代初期の彫像と考えられるが、

ふくよかな肢体と微笑を含んだ童顔など、親しみを感じる尊像である。この三尊像は、県重要文化財に指定されており、かつての神社の本地仏としてその歴史的価値も高い。



(八字文珠菩薩騎獅子図像)

八字文珠菩薩騎獅子図像は、絹本着色。県重要文化財に指定されている。彩色や描線の調子が重く、作風はやや鋭どさに欠けるが、翻転し屈曲する衣や11の宝珠の湧雲の反覆、とくに童顔の描写などに宋風仏画の影響を強く感じさせる画風であって、南北朝時代後期の作と推定されている。

八臂でなく、宝冠をいただくこと、円状に配された蓮華上の11の宝珠、獅子と半跏の尊像の向きが異なるなど、特色のある図像である。比較的に明るい画面であって、ていねいに細部まで描写されている県内では類例の少ない仏画の一つである。



(地蔵菩薩図像)

地蔵菩薩図像は、絹本着色。瑞雲の上にのる台座上に立つ立像であって、左手に湧雲のばる宝珠を捧げ、右手に錫杖を執る地蔵菩薩の通例の図像である。仏体と瑞雲は白色で、他は暗色をもって彩色されているが衣の裾や錫杖その他の一部に金線が配されている。

円満でふくよかな顔、豊満な体躯など親しみを感じさせる図像である。この図像は、室町時代の作と推定されていて、当時における地蔵信仰を反映している遺品の一つであると考えられ、画面はやや暗く、瑞雲はやや形式化して迫力を欠くが、描画は細部にいたるまでいきとどいており、室町時代における仏画を知る上から的好資料の一つである。



(不動明王三尊図像)

不動明王三尊図像は、やや目の荒い絹地に描かれた着色の図像である。本尊の不動明王は、一種の黒不動で、左手に羅索、右手に劍を執って立つ通例の不動明王立像である。両脇侍の中、コンカラ童子は白色セイタカ童子は赤色で描かれている。コンカラ童子は、僅かばかり腰をひねり、両足を僅かに開いて立ち、両手を合掌して杵をとる。セイタカ童子は、大きく腰を後にひいて、手に宝杖をとる。腕釣、足釣その他一部には、金線描がみられる。

火焔をはじめ、全般的に描写は迫力を欠いているが、室町時代の作になると推定され、室町時代の仏画を知る上から注目すべき価値を有している。とくに、脇侍の二童子が成人に表現されている点や二童子がそれぞれ異なる姿態に描写されている点などが注目される。

博物館日誌

47年 1月30日	日本美術院展閉場	2月26日	▼ 第3回博物館教室
2月 1日	唐津魚市場より玄海魚類34点寄贈	2月27日	
2月 5日	佐賀県勤労者美術展開場（大、中展 示室で2月11日まで）	3月 1日	池田知事外務省顧問武内龍次氏を案内 して来館
2月 5日		3月 4日	▼ 第4回博物館教室
▼	第2回博物館教室	3月 5日	
2月 6日		3月 6日	文化庁美術工芸課主任調査官保坂三郎 氏調査官西村強三氏来館
2月17日	第3回博物館協議会開催	3月10日	第1回木器、鉄器保存加工研修会 講師 奈良国立文化財研究所・平城 宮跡発掘調査部 沢田正昭氏
2月19日	第4回研究講座 「肥前名護屋城をめぐる諸問題」 佐賀大学名誉教授 三好不二雄氏	3月16日	
2月22日	定期監査	3月18日	▼ 第5回博物館教室
		3月19日	

47年度の事業予定

企画 展				
展覧会名	会期	会場	備考	
独立美術協会展 共催 佐賀県教育委員会	47年 5月18日～5月28日	2号・3号・大展示室		
野鳥展	6月4日～6月25日	中展示室	常設展併設	
土生・久蘇遺跡資料展	7月20日～8月30日	中展示室	常設展併設	
山口亮一遺作展 共催 佐賀県教育委員会	9月3日～9月15日	大・中展示室	常設展併設	
理科作品展 共催 理科教育振興会	9月23日～10月4日	大・中展示室	常設展併設	
蒼海梧竹展	10月10日～11月7日	1号・2号・3号・大展示室		
第22回佐賀県美術展 共催 佐賀県教育委員会	11月18日～11月26日	1号・2号・3号・中・大展示室		
佐賀県高等学校美術展 共催 県高等学校美術連盟	12月1日～12月6日	大展示室	常設展併設	
学制發布100年教育資料展	12月2日～48年 1月18日	2号・3号展示室	常設展併設	
県立図書館新館開館10周年 記念古絵地図展 共催 県立図書館	48年 1月25日～2月13日	1号・2号・3号・大展示室		

常設展

佐賀県の歴史と文化展	47年 4月1日～5月13日 6月4日～9月30日 12月2日～12月27日 48年 1月5日～1月18日 2月20日～3月31日	1号・2号・3号・大展示室
------------	---	---------------

博物館報	第7号
発行年月日	昭和47年3月30日
編集	古賀秀男
発行	佐賀市城内一丁目15～23 佐賀県立博物館
印刷	佐賀印刷社